
王の酒と自転車 2号

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王の酒と自転車2号

【著者名】

みゅう

【あらすじ】

第5次聖杯戦争。遠坂凜は万を期して英雄王の召喚に臨むが致命的な『うつかり』を連発してしまう。また、聖杯戦争を目撃し、サーキュラントに一度襲撃された衛宮士郎は土蔵に逃げ込む。そこにあつたのは魔法陣と一台のママチャリ。そして彼を救つたのは長身の美女だつた。

第1話 お酒だけですって！？（前書き）

本篇再構成もの。英霊入れ替わりなどの状況改变です。

第1話 お酒だけですって！？

とある屋敷の地下室にて、1人の少女は真夜中に動き出す。

「素に銀と鉄。 础に石と契約の大公。 祖には我が大師シユバイ
ンオーグ。 降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出
で、王国に至る三叉路は循環せよ」

体を、心を歯車に変えて、一つの神秘を成すパーティへと変質させる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

魔法陣に用いた宝石の質は最高ランクのものを惜しむことなくつぎ
込んだ。じきに午前一時、魔力のピークも今で間違いない。触媒に
は、かの英雄王に縁のあると伝えられている“この世で最初に脱皮
した蛇の抜け殻の化石”を用いた。父が前回の聖杯戦争で用いるは
ずだつた聖遺物。

ここまでやつて失敗するわけにはいかないわ。

「
Anfang
ヤング

魔力回路に魔力が走り、地下室には魔法陣を中心として濃密なエー

テルが渦巻いていく。

腕が 体中が、熱い。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さあ来なさい。最強のサーヴァント。私に勝利をもたらす者よ。
誓いを此処に。我是常世総ての善と成る者、我是常世総ての悪を
敷く者。汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守
り手よ ！」

エーテルと紅い光の奔流が、地下室を弾き飛ばすかの如く吹き荒れる。あまりの眩しさに瞳を閉じた。そして期待して彼の訪れを待つ。

確信した。上手く行った。完璧だわ。

場の魔力が収まるのを感じとり、瞳を開く。しかし目の前には肝心のサーヴァントはおらず、目の前には先ほどの魔力嵐で少し散らかつた地下室だけ。

どうこいつことよ。失敗したの？

すると、上方から何か音がした。具体的に想像するならば、何かが屋根に落ちて来て貫いたような、本当なら考えてもないような音が地下室からでも確かに聞こえた。

もしかして、またやつちやつた？

嫌な予感がして上の階、居間に上がる。何故か鬱陶しいことに、扉が壊れて開かなかつたのでヤケクソ氣味に蹴り飛ばした。

「ドア壊れる！？ ああもう、邪魔だこのお……」

すると目の前に広がるの凄惨たる光景。間違いなく屋根から何かが落ちて来て居間を滅茶苦茶にしている。そしてその原因であろう金髪の少年が紅いソファに腰掛けている。

どうしてこんなことになったのか、そう考え込むまでもなく柱時計の針を見ると理解した。この時計の針は一時間早い。つまり、魔力のピークに達していなかつたためにこんなことになつてているのだ。

しかし、この居間には屋根から降つて来たと思われる少年がいる。召喚自体は失敗ではないはずだ。声を掛けようとすると、先に少年の方が話しかけてきた。

「あの、すみませんが。お姉さんが、マスターであつてますでしょ
うか？」

自分より年下の小中学生にしか見えない金髪少年は、腰低い態度で少女に訪ねてきた。

「そうよ。私があなたのマスターの遠坂凜よ

彼の姿を観察する。小柄な少年は一見只の外人の子供に見える。しかしあり得ない紅色の瞳に、人のみではありえないほどの魔力量。これが英靈でなくて何だというのか。

「そうですか。いきなり上空に召喚された上にマスターらしき人の

姿が見当たらなかつたので、しばし呆然としていましたが。お姉さんがマスターでしたか。よかつた」

少年は笑顔を向ける。

やばい。この子凄い可愛い。そつちの氣があつたら一瞬で落ちてしまいそう。カリスマ持ちねこの子。

「それじゃ、色々あつたけど氣を取り直してさつと契約しちゃいましょ」

「ええ。それがいいですね。まだ完全にバスが通りきつていよいようですので」

「サーヴァント、アーチャーの名に懸け誓いを受けます。遠坂凜、この聖杯戦争において貴方を我が主として認めましょ」

拳の令呪が熱くなる。確かにここに契約が交わされたのだ。

ふんアーチャーか。セイバーなくて残念。でもこの子ってセイバーって雰囲気じゃないわよね。あつ。

クラス名は先ほどの誓いで少年の方から名乗つて來た。しかし、まだ肝心なことを聞いていないことに気づく。

「あつ、忘れてた。それで一つ訊ねるけど、あなた本当にあのギルガメッシュで間違いないわね？」

「ええ、間違いなく僕がギルガメッシュ本人です。お姉さん、こんな姿では信じられないかもせんが」

「あの英雄王がこんな子供だつたとはね。まあいいわ。ところで、バスはきちんと繋がつてゐるみたいだけど、貴方の現在の調子を教えてもらえるかしら?」

「ええ、お姉さん。魔力は充分過ぎるほど供給されています。そのおかげか敏捷値と魔力値が上昇してます。他のステータスはあまり変わりません。ただ幸運値が大幅に低下しているのが気になりますね」

「うわあ。私も今確認しているところだけど、あなたかなり凄いじゃない。筋力B、魔力A+、耐久B、敏捷A、宝具A++ですって!? 幸運値がEつてのを除けば、アーチャーとしては破格よ。ひょっとしたらセイバー以上かもしれないわ。本当あなたを召喚して良かった」

見た目が子供のため、能力が低いのではないかと懸念していたがそんなことはない。予想以上の現状に思わず笑みが零れてしまう。アーチャーも顔を若干赤くしながら笑みを返してきた。

「ありがとうございます。そう褒めてもうれるのはうれしいんですけど、実はこの姿って最盛期のすがたぢやないんですね。実際の戦いになつたらリーチの問題が出て来ると思います」

「何でリーチが関係するの? あなたアーチャーでしょ。遠くから狙撃すれば問題ないじやない。もしかして弓を引くのに背が足らないなんて言わないのでよね」

「そこなんですが、さつきの召喚のせいなのか、宝具は2つの内の1つがなくなつていて……」

「えつ?」

一瞬、頭の中が真っ白になつた。何かが崩れ落ちるような音、仏壇で鳴らす“あの音”の幻聴が聞こえた気がする。

「もう一度言つて頂戴。アーチャー?」

「お姉さん、いえ、マスター。報告すると僕が所有しているはずの宝具が一つ足りません」

場の空気が凍りついた。これは“うつかり”では済ませられない事態かもしれない。アーチャーも年相応の子供のような、すがる瞳を向けて来る。

「…………原因はさておき、それって拙いわね。ちなみにどういつものだつたの？」

「ラ、ランクEXの剣です」

「な、EX！？」

「はい、お姉さんの魔力なら存分に扱えるはずだつたんですけどないものは仕方ありません。もう一つの宝具でなんとかするしかないんですけど、けど……」

「けど？ そつち宝具はどんなものなの？」

「ランクはE→A++の王の財宝ガート・オブ・パピロン」というもののなんんですけど、これは本来別空間にいろんなものを入れておいて自由に出し入れができるというもので、そのなかには僕が生前集めていた宝具の原点となる武器や世界中の財宝なんかが入っています」

「世界中の財宝！？ もしかして宝石もいっぱい入ってるの？」

「ええ。いっぱい入っていました」

「いました？」

「中身が、中身が何故か“ない”んですよ」

「なんですつて？ もう一回言つて頂戴アーチャー。ああ、もう。

この言葉一度目ね

先ほどの言葉が聞き間違いでなければとんでもない事態だ。きっと自分は今、死人のように蒼白な顔をしていることだろう。そして目の前のアーチャーも生気が表情に宿っていなかつた。

「武器も財宝も全く手元に“ない”んです。さつき空から落ちてきたとき、飛べるもの用意しようと思つたら何もなくて。何故か“

お酒だけ”はあるんですけどね
「酒、お酒だけですって！？？」

あまりの衝撃に膝から崩れおちた。涙すら出て来ない。むしろ笑いたいほどの衝動が腹の底から湧き起こつて来る。

もうダメだ。勝てる気がしない。

「ごめんなさい。天国のお父様。そしてどうして遠坂家の呪いを解いてくれなかつたのですか。

「僕の手元には肝心の武器がない。これは非常に拙い状態です。お姉さん、これから僕たちはどうしたらいいでしようか……」

「な、なんで、上へなるのよ…」

両手を床について嘆ぐ。あまりにもみつともない姿だが、己の迂闊さに心から嫌気がさすのだ。

「僕に言わないで下さいよ。途方に暮れているのは僕も一緒なんですから。もう少しこれから前向きな対処方を考えましょう。まだ全てのサーヴァントは召喚されていないのでしよう？」

「ええ。まだセイバーとライダー、アサシンは召喚されていないらしいわ」

「でしたらそれまでの準備期間に宝具に匹敵する武器を世界中から集めましょう。僕の攻撃は主に剣の射出ですから。とにかくたくさん必要です。ステータスは他に劣らない自信がありますし、剣も問題なく扱えますが、こちらと違つて敵は宝具を使えます。宝具でなくてもいいのでそれに劣らないぐらいの武器を確保できないでしょうか？」

「冗談言わないでよ！　ただでさえ家の魔術はお金がかかっている

の一。あなたを呼び出すための魔法陣に使った宝石だつてかなり痛い出費だつたのよ！ それでこの現代に宝具に匹敵する武器を調達するですって！？ 「冗談じやないわ。もう今夜はヤケよ！ その酒つてのを寄こしなさい。今日は呑むわよアーチャー！」

「お姉さんつて、未成年じゃ？ 日本つて20歳未満はお酒はダメなんでしょう」

「グダグダ言わない。さつわと出しなさい。世界の財宝を集めつくしたアンタがもつてるからにはよっぽど良いお酒なんでしょう。出しなさい。そしてお酌しなさい。これはマスター命令よーーー！」

「……はい」

酒がないとせつてられないわ。今日の出来事なんか忘れてやるんだから。

やれやれといった様子でアーチャーは背後に現れた空間の割れ目からその酒を取り出した。そして注がれた酒を一気に飲み干す。

「あら。これすごい美味しいじゃない。こんなの一度飲んだら他のお酒なんて飲めないわね」

「気に行つて頂けて何よりです」

「本当においしいわ」

本当に言葉で表せないくらいにおいしい。これのためなら宝石の1個や2個惜しくないわね。ん、アレ？ アーチャーのものは私のもの、私のものは私のもの。うん。間違つてない。なら、これはもしかしたらイケるかもしれない。

「なんだか凄く嬉しそうですね。元気になつてくれて良かつたです」

無邪氣で、そして不幸なアーチャーはあかいあくまの企みを何も知らない。

第1話 お酒だけですかー！？（後書き）

他にメインの作品があるため、正直不定期更新だと思います。が、アイディアは大体出来上がっています。感想など頂けると幸いです。次回はシロウの物語です。

第〇話 それではお使いに行つておまよ（前書き）

本当は士郎サイドの話の予定でしたが、今回がプロローグ的なものになります。かなり短いです。HFのTrueEndに近い形の末来での話。

第0話 それではお使いに行つてきます

「ライダー、もし“先輩”と、この先出会いことがあるのなら
どうか“先輩”の力になつて下さい」

そう最期に言い残して、彼女は去つていった。何の未練もない、
安らかな笑みだった。それを見てつられたのか、この世界で最も愛
する人を失つたのにも関わらず、自然と自分も笑っていた。そして
何故だか涙は流れなかつた。

柔らかな風が吹き、庭先の桜の花びらが舞う。まるで空からの祝
福のように。きっと彼が迎えに来てくれたのだ。これから桜
は自分の代わりに彼がいるから大丈夫だ。

「桜をよろしくお願ひします。士郎」

そしてもう一度、彼女の最期の言葉を心の中で反芻した。

『“先輩”と、この先出会いがあるのなら
どうか“先
輩”の力になつて下さい』

“士郎さん”ではなく、“先輩”。それはかつての日々の呼び方。
その言葉が意味するところは誰よりも自分がよくわかっている。

遺言は確かに受け取りましたよ。

少しづつ薄れていく手を握り締め、空に行つた彼女に誓つた。

「いい笑顔してるじゃない。桜はきっとアイツのところに行けたのね」

唐突に現れたのは、愛する主の姉である人物。彼女の頭をひと撫でして、取り出したハンカチーフを顔に掛ける。

「今まであの子のこと、ありがとうねライダー」

少しだけ目頭に涙を浮かべながら、感謝の言葉を口にする彼女。

「私は桜の“使い魔”であり、家族ですから当然のことです」

第一魔法の後継者として大成した彼女は最盛期の容姿のまま。そして当然、人ではない自分の姿も変わらない。土蔵も、屋敷も、「あ

の頃と変わらないように「元」と、彼女が、彼女の教え子たちが管理し続けた。ただ、田の前にソメイヨシノが咲き誇つていて、姿だけが月田の流れを感じさせる。

彼女と出合つてからの日々が走馬灯のように駆け巡る。

結婚の記念にと、彼がこの木を植えてから確か60と8年だったでしょうか。そんなに経つてしまつたのですね。早いものです。

「それでライダー、あとどれくらい残されているの？」

「あと10分といったところでしょうか」

「そう。もう一度確認するけど、私と『使い魔』の契約を結ぶつもりはないのね？」

「この屋敷を任せせる者はいますし、桜の教え子たちも立派に育つてくれました。もつこの世界に思い残すことはありません」

「貴女は還るつもりなの？」

「ええ。違う世界の桜と土郎のところへ」

その言葉に凛は顔をしかめた。それは無理だとでも言つたのだろう。

そんなことわかっていますよ。それでも、それでももう一度、いいえ何度も奇跡に掛けたいのです。かつての私たちがそれに掛けで、この手に掴んでみせたように。

「ライダー、座に戻れされた貴女は記憶もなくして只のメデューサになる。そして並行世界で桜が必ず貴女を呼び出すとは限らないわ。だから提案があるの。私が貴女を」

「並行世界に飛ばす、ですか？ それではダメです」

「どうしてよ！？ 今の記憶を失くしたら……」

「そもそも現界するための魔力が足りません。魂喰いをするなら別

ですが、それを2人は望まない

「あつ、そうだった」

「この歳になつても“うつかり”なんて、大丈夫でしょうか。なんだか心配です。

「それに何より、それでは一つの世界の桜と土郎しか救えないではありませんか。出会えるだけの2人の力になりたいのです」

「そう」

「もし別の世界で貴女と会つことがあつたらそのときほんとうお願いします」

「私と貴女の仲じゃない。当然よ」

「そろそろ時間のようです。桜に頼まれたお使いに行かないとですね」

腰掛けていた縁側から立ち上がりて土蔵に向かう。そして彼が2号と呼んでいた自転車のハンドルに手を掛ける。彼から正式に譲り受け、彼女が変わらぬように魔術で保ち続けてくれた自転車。俗にママチャリと呼ばれるタイプのものだ。自転車としての機能に不満は多々あるが、これなしで生活はできないほど体に馴染んだ相棒である。

自転車を押して門のところへ向かうと、凛が見送りに来ていた。

「気をつけて行ってらっしゃい、ライダー」

「はい。それではお使いに行つてきます。凛、桜、土郎

どれだけ漕いでとも僅かにしか進まない相棒に跨り、門に背を向ける。

「いつものように」「行つてきます」と、今は亡き愛しき人たちに心の中で告げ、ペダルを力強く踏みしめた。

「ライダーのバカ。本当に使いに行くみたいに……」

薄れゆく意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

第〇話 それではお使いに行つておまえ（後書き）

次こそ召喚。

第2話 僕に力を貸してくれ（前書き）

いよいよ召喚。あるメインキャラの設定がとんでもないことになっています。そしてその影響で土郎も今までのどのルートの土郎とも別人になっています。その点をご了承ください。

第2話 僕に力を貸してくれ

赤い槍を持つた長身の騎士と、黄金の鎧を纏つた小柄な少年が夜の学園のグラウンドにて死闘を繰り広げていた。

「最初に釣れたのがこんな小僧だとは思わなかつたが、中々やるじやねえか。待つた甲斐があつたつてもんだぜ。もつと死命あうぜ」

「できれば僕はさつさと終わらせたいんですけどね。最近、仕事が溜まつてるんですよ」

興奮した口調で頭部目掛けて鋭い突きを放つ蒼の槍兵に対し、黄金の少年はため息交じりに両刃の片手剣で槍の矛先を弾く。

そこからは田にも止まらぬほどの突きが、少年の喉を、眼を、四肢を、内臓を目掛けて襲いかかる。防戦一方のように見える少年。しかしながら積極的な攻撃こそできていないものの、押されているのは槍兵の方だ。動き自体は僅かに蒼い槍兵のほうが早い。だが少年は力押しで槍を弾きながら前に踏み出し、間合いを取らせないようにする。そのためどうしても槍兵は間合いを保つために後退しながらの戦いになる。

「にしても、その剣の扱いを見ると雑だな、お前。何と言うか雑だ。サーヴァントってのは本来最盛期の姿で現れるつてもんだろ？」

「セイバー、実はお前、本気を出せないんじゃないのか？」

「そう言いながら、僕に力負けしてるぢやないですか。そんなんですから、今はまだ、本気になるまでありません。そういうことだと思って下さい。僕のマスターはケチなんですよ」

自信を安く見られたことに憤慨し吠える騎士。

「舐めやがってセイバー！ 本気を出さなかつたことを後悔させてやる！」

より多くのフェイントを混ぜながらも、より鋭く急所を狙つた突きが少年に襲いかかる。楽しむための戦いが、敵を仕留めるためだけの戦いに切り替わった。

予想以上にイケてるじゃないアーチャー。

無銘の片手剣で戦うと言いだしたときは正氣かと疑いたかつたが、確かにあれだけのステータスがあればランサーにも十分対抗できる。おそらくアチラは手出ししなくても大丈夫だろう。なんたつてアイツには切り札がある。しかも都合のいいことに相手はセイバーだと勘違いしたまま。格好の的になると良いわ。

掴み掛けている初勝利の前に思わず笑みが零れそうになるが、問題は私の方だった。

アーチャーとランサーが戦っている傍らでマスター同士も戦っていた。相手は男物のスースを纏つた男装の麗人。名はバゼット・フラガ・マクレミツ。封印指定の執行者。間に合わせの剣でも何か抑えられているランサーよりも、彼女の方がはるかに厄介な相手だった。おそらく全マスター中、戦闘力だけで言えば最強だろう。

しかも彼女は手にナックルを嵌めて、ボクシングよろしくパンチの応酬を繰り出してくるのだ。人間凶器といつても過言ではない。

ランサーのマスターが接近戦を仕掛けて来るのに対し、「こちらはガンドで牽制しながら距離を取り、適宜宝石魔術を打ち込む。隣の戦闘とは逆の状況だ。

強化の魔術を込めた宝刀を使用しているが、それで対峙するのがやっとというのが現状。

「まさか執行者のマスターがいるなんてね。しかもボクシング？一発が重過ぎんのよ」

「セイバーのマスター。その歳で私の動きについて来れるとは貴女も中々やりますね」

私に体術の心得がなければ瞬殺されてしまう。必死でガードするが、その度に腕にしびれが走る。

正直このままでは厳しい。相手の体術がボクシングだけだと油断していた矢先、鋭い膝蹴りが鳩尾に刺さる。

口から血が出た。とにかく重い一撃。追い打ちの回し蹴りを横に転がるようにして回避する。

「貴女、本当に人間？ どつかの兵器の間違いないの？」

「どちらでも構いません。今私は貴女を葬るために存在するのですから。……そろそろ終わりにしましょう。セイバーのマスター

」

5mほど先で膝をついている私を見下すように、ナックルを弄り

ながら彼女は最終通告を告げる。

宝石を湯水のように使えば勝機はあったが、私たちはまだ残り6機のサーヴァントとそのマスターを倒さなければいけないのだ。戦争の序盤からそんな勿体ないことはするわけにはいかない。せいぜい今は私に勝つたつもりでいい。

相対するマスターを睨みつける。その奥に撃ち合っているランサーと、アーチャーの姿が見えた。よし、ベストポジションだ。アーチャーの射線上にランサーだけでなく、マスターも並んでいる。加えてランサーとは適当な距離も取れており、少なくともマスターの方は“殺れる”絶好のチャンスだ。

そう判断した私はレイラインを通じてアーチャーの戒めを解く。

「マスター」と打ち抜きなさい、アーチャー！！！

確かにそう命じた。だが、アーチャーは宝具を使わなかつた。それどころか動きを止めている。

“殺りなさい”！！
“どうこうことよ、アンタは私の下僕サーヴァントでしょ。さあと

もう一度命じるが、アーチャーは動かない。そしてそれはランサーも敵マスターも同じだった。彼らも一步も動かない。どこか違うところに対しても3人は視線を向けていた。そう、私の背後に。

異なる気配に気付いた私は振り返るとようやく状況を理解した。校舎の中へ逃げ込む影。人払いはしつかりしてあつたはずなのにも関わらず、まだ学園に人が残っていたのだ。また“うつかり”をやらかしたらしい。アーチャーを呼び出してからこれで通算何度目の“呪い”やらと、強い自己嫌悪が襲う。これが私のせいならば、私が尻拭いをしなければならない。

だがそれより早く、敵の主従が影を追い始めた。口封じに向かったのだろう。サーヴァントと封印指定の執行者が追っているのだ。間違いなく彼は生きては帰れまい。そして不幸な運命に導かれようとしている彼の姿に私は見覚えがあった。

「何でようによつて、“アイツ”がここに居るのよー。」

何でここに居るのだと、自分のことを棚にあげて“アイツ”に恨み事を言いながら、敵の跡を追つ。だが、“ソレ”を見たときには、自分の中の都合のよい感情は全て否定された。

“アイツ”のせいでもない。私の“うつかり”のせいでもない。

“私”のせいで、彼は死んだ。全て“私”的だ。

その責から逃げるためではない。そう言い聞かせながら、私は一つの選択をする。これは私の気まぐれ、心の贋肉のせいだと誤魔化して、私は一番大切な紅いペンダントを使うことを決めた。

それなのに、それなのに

私は彼に裏切られた。

深夜、コンビニに買い物に行こうとしたら教室に財布を忘れていたことに気づき、仕方なくいつもの裏ワザでこっそりと取りに帰った。ただそれだけのことだったのに。どうしてこうこうことになつたのだろう。

グランドで繰り広げられている一組の死闘を目にしました。

一組は自分が一生かかってもできそうにないほどの高度な魔術を惜しみなく放つツインテールの少女と、それに対して拳で立ち向かう男装の女性。何故魔術師が戦っているのか疑問であつたが、もう一組の戦いの方に興味が向いてしまつた。

黄金の剣閃と紅い槍の軌跡。とても人間業とは思えないものだつた。しかも自分より幼い少年が若干押しているように見える。自分には辿りつけない領域にしばし言葉を失つていた。そして自らの理想である姉の姿と比較する。高度な技術を力技で叩き伏せるその少年の姿。姉もどちらかと言えば腕力で物を言わせるタイプだが、それとは違う。姉の技の方が好みであったが、何故か少年の剣には惹かれるものがあつた。そして悔しかつた。

何故、彼には才能があるのにそれを極めようとしないのだろう。才能がないからこそ極めるしかない自分と比較して怒りの感情、殺気さえ覚えてしまつた。それがいけなかつた。

目線が合つてしまつた。

自分の存在が彼らにバレた。おそらく自分は魔術師として認知されていない。このままだと神秘の秘匿のために殺される。だが、先ほどの光景は魔術師であっても見てはいけないものの類だと言うことは直感で分かつた。

だから逃げた。みつともなかつたが逃げた。

絶対に敵わない存在と言うものを、この身はよく知っている。“アレラ”は義姉と同じ“使い魔”だ。人間には絶対に勝てない。だから逃げた。でも槍兵に追いつかれてしまつた。

必死の抵抗を試みたものの廊下で心臓を一突きにされ、自分は確実に死んだはずだった。

死んだはずだった。

しかし、再び目が覚めてしまった。死んだはずの廊下、体には傷一つない状態。しかし、服は傷つき血まみれの状態。傍には魔力の残った赤い宝石のペンダント。思い浮かぶのは、追つて来なかつた方の少女。彼女の気まぐれなのか、どうやら自分は助けられたらしいことは理解できた。だが、周囲に彼女たちの気配はない。救われた命に感謝しつつ、一刻も早く家に帰ろうと決意する。

「大丈夫ですか！ シロウ！…」

「うん、アル姉。何でか生きてる」

そして当然のように家路の途中で姉に出会つた。先ほどの魔力が氣になつたのか、帰つて来ないのが気になつたのか、多分両方だろう。眼を腫らして泣きそうな顔で見つめている。本当に心配させてしまつたのだろう。彼女を泣かせることができなかつたことに心から安堵する。

良かった。生きていて良かった。

月の輝く夜。月光に照らされる義姉のブロンドの髪と白い肌。今田ほど彼女が美しいと思った日はなかった。

「これだけの血、またシロウは無茶をしたのですか！」

血だらけの胸元に手を当てて、彼女は怒りを表しながら言ひ。

「無茶をした覚えはないんだけど、学校でアル姉と同じような感じの“使い魔”たちが戦つてゐるを見た」

「やはりそうでしたか。私が傍に居れば……それでその後どうなったのですか？」

「うん。口封じのために殺されかかつたけれど、他の魔術師に助けてもらえたみたい。何か裏がありそうだけど、とりあえず俺が生きてるつてのだけは間違いない。だから早いとこ家に帰りつ」

そして家に向かつて歩き出す。家に帰れば平穏が待つてゐるはずだった。

着替えを終えて、これから縁側で話し合いをしようとしていた矢先だった。結界の警報が鳴り、家に突然の襲撃者の訪れを伝えた。先ほどの槍兵と、男装の麗人。彼らと庭先にて相対する。

「確かに心臓を貫いたはずなのに生きているとはな。一体どういうタネを使つたんだお前？」

「只の一般人だと思つたのですが、高度な治療魔術の使い手にして、しかもマスターでしたか。迂闊でした。しかし今度こそ確實に息の根を止めて見せます」

肩に担いでいた紅い槍をクルクルと回した後、矛先をこちらに向ける槍兵。傍らで魔術師もファイティングポーズをとる。

「シロウは下がってジッとしていてください。私が相手をします」

自分を護るようにアル姉は前に出る。そして本気の時の服、蒼いドレスの上から白銀の甲冑を纏っていた。そして手には“何か”を握っている。

「ほう。私達2人相手を同時に相手取るつもりですか」

「それくらい出来なくて何が“使い魔”か。問題ない」

「いいぜ、お前クラスは何だ？ セイバーとはさつき殺りあつたし、アサシンのような後ろめたい存在ではなさそうだ。ライダーかアーチャーってどこか？」

「貴様にそれに応える必要はない」

そう言つてアル姉は“見えない何か”、おそらく剣を槍兵に向かつて真上から叩きつける。

あんなに怒つているアル姉は初めて見た。

今までに見たことのないほどの圧倒的な技の嵐を槍兵に向ける。対する槍兵も神速の突きによる弾幕を繰り出す。

再び人を超えた身の戦いが衛宮庭で繰り広げられた。

一旦距離を取つた2人が剣戟と突きの代わりに言葉を交わす。

「どうしたランサー。止まつていては槍兵の名が泣こう。そちらが来ないなら、私が行くが」

「は、わざわざ死に来るか。それは構わんが、その前に一つ訊かせろ。貴様の宝具、それは剣か？」

「ああどうかな。戦斧かも知れぬし、槍剣かも知れぬ。いや、もしや弓という事もあるかも知れんぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ嬢ちゃん。強がりは大概にしな。確かに見えない得物つてのは戦いにくいが、さっきのセイバーの方が一撃、一撃は重かつたぜ」

「何をぬかす貴様、我が宝具を受けてみるか！？」

「ああ。こちらこそ我が槍の威力、見せつけてやろう」と思つたが、その必要はないらしい」

大きく一步後ろに跳躍した槍兵は告げる。

「お前さん、2人を引き受けると言つた割にはマスターの警護がお留守じやねえか。悪いがウチのマスターの勝ちだ」

少女の顔が蒼白になり、ランサーの背後に位置する土蔵を見る。木刀を振るいつつも、門のところに追い詰められていた彼は、胸元を殴り飛ばされ土蔵の門ごと中に突き飛ばされていた。向かおうとする彼女の前に、無慈悲にも男が立ち塞がる。

「シロウ逃げて！……」

どうやらアバラを2、3本持つて行かれたらしい。土蔵の中に突き飛ばされ、背中を自転車にぶつけた。そのせいで左足首さえ挫いたらしい。最悪だ。門のところに魔術師が立ち塞がる。もう退路はない。かと言って、先ほどの木刀は彼女の背後。いくつも口の剣術を鍛えていたところで肝心の武器は手元にない。

完全に詰んだ。死という言葉が頭によぎる。

いやだ。まだ死にたくない。

俺は絶対に生きなくちゃいけないので。

10年前の地獄の光景が脳裏に蘇る。

黒い太陽、燃え盛る焰、誰かの亡骸、最期の嘆き、そして

俺を助けてくれた2人の笑顔。

絶対俺は生き延びなくちゃいけないのに。なのに、俺は無力だ。

外でアル姉が呼ぶ声がした。こいつやつて俺は護られるばかりのまま終わってしまうのか？

2人みたいになれず、俺は誰も救うことができないまま終わってしまうのか？

そんなのは絶対に嫌だ。せめてアル姉は俺の手で護りたい。

でも俺には力がない。俺に力があれば、みんなを救つてやれるのに。

」

しかし無慈悲にも魔術師は止めを刺すべく、近づいてくる。

「もういいでしょ。せめて最期は苦しまぬよう、ひと思いに殺し

てあげます」

目の前の魔術師が渾身の魔力を込めて拳を振り被つた。最期の瞬間に、普段全く信じてもいない神へと祈る。

俺に力があれば！！！

最期にそう願つた。

その瞬間、土蔵を中心にして光の奔流が走る。新しく生まれ出ようとする存在の圧倒的な威圧感に、魔術師は後方に大きく飛び退き、場にエーテルの嵐が吹き荒れた。

光が収束して、光と呼べるものは月の光だけになつた。そして月光に照らされて立つていたのは、1人の美女。腰まで届くほど長く伸ばした藤色の髪に、眼帯で両目を隠した長身の女性。だがその存在は明らかに人のものではなく、庭で戦つている2人と同質のものと感じ取れた。

彼女は口を開く。

「　　問いましょう。貴方が、私のマスターで間違いありませんね？」

マスターという言葉は敵の魔術師も使っていたが、おそらく使い魔の主という意味だろう。すると、左手の甲に焰で焼かれたような鋭い痛みが走った。もしかしてこれが契約の証なのだろうか。

「マスター？　お前も“使い魔”なのか？」

「ええ。サーヴァント・ライダー、召喚に従い参上しました。マスター、ご指示を」

「ライダー、そう呼べばいいのか？」

「はい。私は騎兵の枠を与えられたサーヴァント。ライダーとお呼び下さい、マスター」

サーヴァントという意味も、騎兵の意味も理解できなかつたが、彼女が自分の使い魔になったことだけは理解できた。上半身を起こして、右手を差し出す。

「ライダー。俺に力を貸してくれ！　俺には、助けたい人がいる」

彼女は跪いて差し出された手を取り、誓いを口にした。

「了解しました　　これより我が魂は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にあります。　　ここに、契約は完了しました」

第2話 僕に力を貸してくれ（後書き）

士郎はライダーです。そしてここに書いた士郎は切継だけでなくアルトリアにも影響を受けています。なぜアルトリアがいるのかはおいおい書きます。オルタじゃなくてご存知ハラペコ王の方です。

バゼットさんははじめ、マスター や サーヴァントの組み合せが変わっています。良かつたら感想頂けると嬉しいです。

第3話 この真名にかけて

私は座に戻った。

そして、“彼女”に召喚されるのを待つだけだった。どれくらい待つたのかはわからない。なぜなら時間という概念はこの場には存在しないから。

“メドウーサ”という英靈に統合され、この記憶が無くなつたとしても、その世界の“彼”と共に“彼女”を救つてみせる。この想いが“メドウーサ”的に残つていれば、私はそれを必ず成し遂げみせる。そう自分に誓つて座に還つた。

それからのこととはよくわからない。おそらく“メドウーサ”に統合され、本来なら“私”的意識など存在しないはずだつた。

「俺に力があれば……！」

かつての戦友の声がした。それが“彼”的声だと認識することができた。メドウーサとしてではない、ライダーとしての私がそれを認識することができた。

彼は力を求めている。

だから私は行かなければならぬ。“彼女”との誓いを果たすために。

そうして私は一度目の第5次聖杯戦争に、“ライダー”として召喚された。

「　　問いましょう。貴方が、私のマスターで間違いありませんね？」

赤い短髪、小柄ながらも鍛えられた肉体、どこか呆けた表情。私を呼んだであろう少年は、遙か昔に肩を並べて戦った頃と同じ姿。間違いなく彼は衛宮士郎その人だった。

彼は胸部を左手で押さえながら、仰向け氣味に座り込んでいた。その手に宿る3画の令呪が赤く光っているのを確認できた。よつて彼がマスターなのはほぼ間違いないが、呆けた表情を見るに聖杯戦争のことを知らない状態なのだと推測する。

「マスター？ お前も“使い魔”なのか？」

“マスター”という言葉の意味がわかつていなかつたようだ。やはり、今の彼はまだ聖杯戦争について知らない。しかし彼の返答は予想以上にしつかりしたものだった。「なんですか？」と返されても仕方ないと考えていたため、目の前の彼の評価を改める。少なくとも自分を“使い魔”だと認識している。“使い魔”という認識があつても“サーヴァント”という言葉を知らない様子から、彼は聖杯戦争のことを見らぬ魔術師という立ち位置にいるのだろう。

「ええ。サーヴァント・ライダー、召喚に従い参上しました。マスター、」指示を

目の前の彼は胸部を抑え吐血していることから、間違いなく敵の襲撃に遭っている。今は懇切丁寧に聖杯戦争のシステムについて教えている場合ではなさそうだ。彼の僅かな勘違いを正すことなく、ごく普通のサーヴァントとして当然の態度をとった。わが身ながら白々しい。

「ライダー、そう呼べばいいのか？」

「はい。私は騎兵の枠を与えられたサーヴァント。ライダーとお呼び下さい、マスター」

マスターと呼んだことが効いたのか、彼は私を自らの“使い魔”

と認め右手を差し出した。

「ライダー。俺に力を貸してくれ！ 俺には、助けたい人がいる」

彼の言つ“助けたい人”が桜なのかそれとも他の誰なのかはわからない。しかし私はその瞳に背中を預けていたころの輝きを見出した。彼女が最も苦しんでいたとき、たった2人で戦つたあのときと同じ瞳の輝き。確かに頼りない彼の面影も垣間見える。しかしそれ以上に彼の瞳には信じてみたい何かがあつた。

背後に気配が近づいてくる。これ以上時間がない。私は跪いて差し出された手を取り、誓いを口にした。

「了解しました これより我が魂は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にあります。ここに、契約は完了しました」

スース姿の女性が背後に迫る。私と同じくらい背が高く、体格もいい。戦い慣れた者の臭いがする。初めて相対するが、おそらくは敵のマスター。彼女が土郎をこんな姿にしたのだろう。だが、私が召喚されたことに酷く驚いている声色だった。

「この場でライダーを召喚とはどういうことですか！？ 貴方は先ほどまでマスターではなかつたと？ ではランサーと戦っているサー・ヴァントは一体……」

ランサーと戦っているサー・ヴァント？

土蔵の外に感じる一いつの魔力。野獣のように猛々しく、殺意と闘志に溢れた魔力は彼女の言うランサー、私の知っているあの槍兵と同じのものだろつ。そしてもう一つ。凛々しく、誇り高い魔力の塊これは間違いなく彼女のものだ。彼女が士郎のサー・ヴァントでないのならば、考えられるのは凛がマスターだろうか？いや、思案する時間はない。士郎に確認するなど、もつての外だ。

瞬時に敵の方へ振り向いて短剣を投擲。

「なつ！」

心臓目掛けて放つた短剣は地面に突き刺さる。敵は動搖しながらも鮮やかなサイドステップで右に避けた。そこに前傾姿勢で飛び込み一步で間合いを詰める。

左口一キック 当たつた。だが、若干浅い。初撃が奇襲でなければどうだつただろうか。彼女、人間にしてはできる。

それでも足払いも兼ねたその一撃は敵の右足の支えを奪つた。体を後ろに仰け反る形になる魔術師は苦悶の表情を浮かべる。

「痛つ」

そこに投擲した短剣を鎖で引き戻し、追撃を加えようと構えるが、敵は仰け反った姿勢からバック転の要領で後方へ跳躍。そのまま退却してくれればいいが、その保証はない。

2回転目の着地に合わせるように、もう一度短剣を投擲した。

しかし短剣は今度も敵を捉えることなく、高い金属音と共に弾かれる。赤い槍を持った騎士、ランサーが彼女を庇う形で間にに入った。

「バゼット、危なかつたじやねえか」

「ランサー、感謝します」

「そもそも言ってられねえみたいだぜマスター」

敵の魔術師は安堵の声を発するが、槍を携えた騎士は目を鋭くさせたまま警戒の色を一層強める。その目線の先にはもう一人の騎士の姿があつた。

ランサーと敵の魔術師の左方を取るようにして現れたのはセイバー。影に呑まれて闇に墮ち、かつて私たちと死闘を演じた彼女ではない。“彼”のサーヴァントとして光り輝いていた頃の彼女がいた。

好戦的なセイバーだ。少なくともランサーを仕留めようとするだろう。しかし“器を満たす”速度はできるだけ遅い方がいい。少なくとも、今はまだ。

「ランサーのマスターよ。観念するがいい。これで2体1だ！」
「セイバーとの戦いで消耗した後に2騎のサーヴァント、流石に分が悪いですか」

「ライダー、助太刀感謝する。まさか聖杯戦争が再び始まるとは。私はセイバーのサーヴァント。故あって貴公のマスターを護る者

士郎を護っているという彼女の言を聞いて安心するが、彼女の言葉にはどこか引っかかるものがあった。しかし、それ以上にランサーの主従は驚愕を隠せなかつたようだ。

「セイバーが2騎だと！？」

「クラスの重複はありえない。ですが、それならば、まさか！？」

「気付きましたか？」魔術師「ええ。一つの聖杯戦争に召喚される

サーヴァントのクラスが重複することは、まずありません。

私は10年前、この地に降り立ちました

「おい、今なんて言いやがった？」

「シロウもマスターになつたことですから隠し事は止めましょう」

後ろ髪を纏めていた青いリボンを彼女は左手で無造作に取り外す。すると、場における彼女の威圧感が急激に増大した。

「おいおい、その魔力。さつきまでと違ひすぎるだろうが、そりやあ！？」

ランサーは顔をしかめる。それはそうだろう。さつきまでとは2段階ほども違う。圧倒的だ。私にはわかる。あの“黒い騎士王”とまではいかなくとも、それに準じるほどの存在感。

見えない剣を地面に突き立て、勇ましく、そして高らかに彼女は宣言した。

「私は第4次聖杯戦争にてセイバーとして喚び出され、そして聖杯を手に入れた。ランサー、そしてそのマスターよ。この最強を恐れぬのなら、いざ、死力を尽くして来るがいい。この剣にかけて、貴様等の挑戦に応えよう！――」

拙い。敵マスターが軽く負傷とはいえ、これで好戦的なランサーが退く理由が少なくなつた。彼は戦いを求めて現界した身、最強を目の前にして立ち向かわないはずがない。

何をセイバーは考えているのだろうか。これでは敵が退くどころか逆効果ではないのか。そう思案しているとセイバーが口を開いた。

「ライダー。ここは私が。騎兵たる貴女にシロウを任せます」

「うこう」とか。きっとランサー相手では2対1でも退かない可能性もあつた。それならば、確実に足止めのできるセイバーが足止めをして、私に士郎を逃がさせる方がベター。そうセイバーも判断したのだろう。ならば、グズグズしているわけにはいかない。

しかし、きっと士郎は逃げるのを良しとしない。だから、

「ライダー、アルネえの加勢をしてくれ。俺はこの戦いを止めたい！」

「すみません。マスターそれはできません」

「なつ……ライ、ダー。おま……」

近づいてきた士郎の首筋に手刀を入れて意識を奪つ。左手で彼の体を担ぎ、使いなれた相棒を呼び出す。

彼を肩に担いだまま右手で自転車のハンドルを握り、一触即発のセイバーに声を掛けた。

「マスターのことは任せました。セイバーご武運を。しかしできるなら、彼らはまだ倒さない方がいいとだけ忠告しておきます」

「そうか。戦略のこととを責女が考えているのでしたら一考しておきます。それより早く」

「ええ、それでは」

ペダルを強く踏み出し、“ライダー”になつてから扱えるよつこなつた新たな宝具の真名を解放する。

「ライフ・サイクル
自転車2号」

桜色の閃光と共に、濁さだした相棒は一気に最高速に乗った。

そして、新都と深山町を結ぶ橋の下まで無事に辿りつく。途中、金色の何かを轢いたゞ気がするがそれは大したことではないだろう。セイバーは心配しなくても良いはず。あとは土郎の眼が覚めるのを待つだけ。知っている第5次聖杯戦争との違いを整理する。そして今日も苦しんでいるであろう彼女に思いを馳せた。

「桜、必ず私たちが貴女を救つてます。英靈“ライダー”この真名にかけて」

おまけ

「あれはライダー！？ アイツの姿が一瞬見えたけど、まさか彼がマスターだったなんて」

「僕を盾にするなんて酷いです」

「だつてアンタ耐久Bじゃない」

「そういう問題じゃないですよ」

「そういう問題よ。大体ケガ一つないじゃない。良いから黙りなさい」

「うう」

「それにしても、彼がマスターであることに気づかないで助けた私の“うつかり”も酷いけど 恩人の私たちを轢くなんていい度胸してるじゃないアイツ」

「もしかしてアレですか、お姉さん？」

「殴つ血KI」

第3話　この真跡にかけて（後書き）

2号の力はそのうち

第4話　「これは一献如何かな？」

膝枕をされている士郎はまだ目を覚まさない。多少力を込め過ぎたせいかもしぬないが、きっと疲れているのだろうと思つことにする。橋の下だから少し風が強い。冬の風に当てられて体を壊さぬよう、士郎に魔術の加護を与えて休ませ続けた。

もう20分ほど立つ。士郎が眠っている間に数少ない情報から現状についての考察を巡らせる。セイバーの方は決着がついたはずだ。ランサーは足も速く、疲弊氣味な様子だった。おそらくランサーの撤退か敗北。あとはどのタイミングで帰宅するべきか。他のサーヴァントが魔力に惹かれて集まつてくる可能性があるため、今はまだ戻るべきではない。

それにしても既に士郎の傍にセイバーがいて、しかも彼女が第4次聖杯戦争の生き残りだというのは嬉しい誤算だった。なぜ黒化していいのかという問題を差し置いておくならば泥に呑まれて受肉したか、あるいは願いによつて受肉したかといつ経緯が予測できる。

そして士郎とセイバーの言動からして2人は親しい仲。士郎やロード・エルメロイ?世から伝え聞いた話を総合しその経緯がこの世界でも変わつていなければ、セイバーのマスターは衛宮切継士郎の養父だ。彼が現時点で存命なのは不明なもの、士郎の敵に回ることはあまり考えられない。

彼女がどこまで聖杯の真実について知つているか、聖杯を求めているのかという疑問はある。しかし他のマスターと同盟を結ぶことなく、セイバーには士郎を護るという点において共闘できる関係にあるのは素直に嬉しいことだ。何しろ今の自分は　　弱い。体

は重く、魔力は不十分。先ほどの魔術師が如何に戦闘慣れした人間だつたとしても、こちらの動きが悪すぎた。

呆れのあまり、ため息が自然と零れ落ちる。これではあの慎二に使われていた頃とほぼ変わらない。いや“食事”をしていない分だけ、今の方が悪いかもしない。

「桜と比べると随分調子が悪いですね。しかもきちんとしたバスも通っていない
流石といつかやはりというか、士郎は士郎ということですか」

そう、士郎からはきちんとしたバスが繋がつておらず。自身の魔力だけで活動している状態なのだ。だから新たに宝具になった「自転車2号」には随分と助けられた。何せ必要な消費魔力はペダルを漕ぐ分の魔力だけ。それでいて何倍もの加速力に変換するという、反則級に魔力変換効率のよい宝具だった。ペガサスより速度も威力も落ちる上、秘められた神祕は限りなく低く、ランクも最低のE。しかし未来のエコカーよりも遙かに低燃費なこの乗り物は戦闘だけでなく、今夜のような撤退にも申し分ないほどの活躍をしてくれるだろう。

そして“ライダー”として召喚された今、過去の聖杯戦争では持ち得なかつたもう一つの力を手に入れている。これで有する宝具は5つ。アドバンテージは大きいはずだった
魔力供給の問題
さえなければ。

士郎なら他者を襲うことを絶対に良しとはしないだろう。となれば取れる手段は残り2つ。他者を巻き込むのを良しとしないならば、安らかに眠っている士郎を襲うしかない。桜のことを考えれば更に1つまで選択肢は絞られる。

「優しくしてあげますからね。士郎」

そつと咳いて、膝の上の彼に顔を近づけようとする
それは背後からの声に遮られた。

「 今宵の月はまた格別だと、そう思わぬか?」

声の主はサーヴァント、見覚えのあるこの姿は間違によつもない。
士郎を庇う位置に立ち、逃走の体制をとる。

「アサシンー? 何故貴方がここにいる!...?」

着物姿に無造作にまとめた長髪、長物を備えた侍の風貌と時代が
かつた口調。彼は柳洞寺の門を護っていたあのサーヴァント、佐々
木小次郎だった。しかし相手は何を疑問に思ったのか眉をひそめな
がら応えた。

「何か思い違いをしておるようだが、私はセイバーのサーヴァント、
佐々木小次郎。生憎と暗殺の類は不得手でな」

「セイバー? 彼女が残ったことでまだ枠が空いていましたか」

「彼女とやらのことは存ぜぬが……私には剣以外の才能は持たぬ。

して、そなたは？」

「私はライダーのサーヴァント。名乗りを上げた貴方には申し訳ありませんが、語れるのはクラス名までです。私の真名は明かせません」

「何、気にするな。私が名乗りたいから名乗つたまでのこと。それにしてもだ。そなたのような可憐な華が騎兵とは、こたびの戦それだけでも喚び出された甲斐があったものよ」

「私のような物を可憐など褒めすぎです。褒めても何も出ませんよ」

この男はスラスラと恥ずかしいことを言う。前回はほとんど話すことにはなかつたが、これがこの男の素なのだろう。そして彼は最初の問い合わせ再び投げかけた。

「ライダーよ。今宵は良い月だ。そう思わぬか？」

「ええ。良い月ですね」

「いや、冗談半分で尋ねてみたのだが。そなた、斯様な日隠しで見えておるのか？」

社交辞令として返答したつもりだったが、そう言われて気付く。彼ほどではないものの、今の私の姿はあまりにも浮いている。魔力でターネルネットのセーターとジーパンを編み、「自己封印」の代わりに魔眼殺しの眼鏡を掛けた。

「現代風の装いもできるのか。それでどうだライダー。今宵の月は綺麗だと思わぬか？」

「確かにここは二つの月が美しい場所ですね。セイバー」

セイバーと彼を呼ぶのに若干戸惑いながらも、今度は社交辞令でない返答を返す。夜を優しく照らす青白い光が水面に反射して淡く光る。そして水面の光が風に揺られる様は、彼の言うとおり確かに

美しかつた。

「ふむ、一いつの月か。サーヴァントの中にもあなたのように風流を解する者がいたのは僥倖。そなたとはじつくり雅について語り合いたいものよ」

「残念ながらセイバー、今は聖杯戦争中です。状況がそれを許さないでしょ？」

「私は戦いを好む性だが、生憎と今そなたと一緒に交える気はない。そこに伏せておるそなたの主を見るに、本気を出せぬのである。この現世に騒び出され、過去に名を馳せた英雄たちと剣を交えることができると言つなら、お互い最善のときに仕切り直したが良いといつもの」

「そうですか。その方が私も助かります。いつ他のマスターに襲われるかわからないと、彼を気にしながらでは私も本気を出せませんから」

「では剣を交えるのは次の機会にしよう。しかし、このよつな月夜に雅を語らえる女と会えたのだ。丁度私の手元に良い酒もある。ライダー、ここは一献如何かな？」

「酒ですか？」

「氣の合つた住職殿から少々頂いてな。この世のものとは思えぬ極上の品よ。用を肴に語らおうではないか」

良くセイバーの格好を見てみれば、つまみが入っているであろうが入つていて見えるコンビニ袋と、一升瓶の頭が覗いているスパーの袋を手に提げている。はじめからこの男は戦うつもりは毛頭なく、酒を飲むに相応しい場を探して歩いていた、ということなのだろうか。

「戦う理由もありませんし、せつかくの誘いです。これで士郎の安全と得るものがあるのなら、私に断る理由はありませんね」

「語らいを邪魔する無粋な輩は私が追い払おう。気にせずこの至高の酒を飲むがいい、ライダー」

「そのような心配は無用です。どうせなら飲み比べでもしますか？」

「その自信、そなたは“うわばみ”の類であったか。飲み比べも良いが、生憎この酒は味わわずに飲むのはあまりにも勿体ない品。時間もあることだ。じっくり語らおう」

実は正体を言い当ててているセイバーに内心動搖する。差し出された袋からお猪口と一升瓶を取り出す。

「そうですか、ぜひ期待したいものです。まずは私が酌をしましょ
うセイバー」

それから15分ほどセイバーから渡された酒を味わった。確かにこれは今まで飲んだ酒とは比べ物にならないほどに絶品で、勿体ないと言つたセイバーの意味がわかつた。

聖杯戦争とは全く持つて関係のない話、自動車やテレビ、そびえ立つビルや先ほど寄つたコンビニなど、主に現世の生活について語り合つた。彼にとって未来のこの地には珍しいものが多いらしく、彼は現世を謳歌しているらしい。現世については誰よりも知つてゐる私は彼の疑問に答えたり、自分なりの見解を述べる。田の前の大橋の造型と、下の公園のデザインについてセイバーが語つていたところで、思わず人物が現れた。

「くそつ、こんなところに居たのかセイバー。今夜こそ敵を探しに行くと言つたのにほつつき歩きやがつて」

「慎一、そなたも来たのか」

間桐慎一、かつての私の代理マスターであり、桜を苦しめていた人間の内の一人。現在の方針こそ固まつていらないものの、これから聖杯戦争でどうしても関わる必要があつた人物だ。彼を見て本当に安堵する。桜に召喚されなかつたのは誤算であり、少し悲しくもあつた。しかし彼に便利な道具として扱われるぐらいなら、例え未熟な魔術師であつても士郎で良かったと心から思った。

「貴方がセイバーのマスターでしたか」

「なつ、お前はサーヴァント……って何やつてんだよお前らーーー！」
「見ての通り月を肴に飲んでる。最高の酒と月、そして美女だ。これは飲まずに居る方が無理といつもの」

「……お前日の前に敵がいるのに戦う気ゼロだろ」

言動から察するに常にセイバーに振りまわされているのだろうか。イーチャンティブをとれず四苦八苦している様を見て、何だか嬉しくなつてしまつ歪な感情に気づく。思わず口角も吊り上がりてしまった。どうやら今までの自覚以上に彼の事を嫌つていたらしい。しかし、どこか自分の知つている慎一とは違う気がしながらも、やはり同じだと思つてしまつ既視感があつた。饒舌だったセイバーとの対談とは打つて変わり、努めて冷酷な口調で彼に対して言葉を発した。

「おそらくないでしようね、セイバーのマスター」

「お前、何のサーヴァントだ……つて隣にいるのは衛宮じゃないか。もしかしてお前！」

「ええ。私は彼のサーヴァント。私にも交戦の意志はありませんが彼を襲うなら話は別です。しかし、今の様子だと貴方は私のマスター

一と知り合ひのよつですが、

「ああ、よく知つてゐる。まさか衛宮のやつが魔術師だつたなんて」

横たわつてゐる土郎を見るその眼は、劣等感に塗れた見慣れた鋭い眼つきだったが、何を思つたのか優越感に浸つたときによく浮かべるだらしのない目つきに変わつた。どうせ碌なことは考えていい。

「それで貴方には交戦の意志はあるのですか？」

「慎二よ。先に釘を刺しておぐが令呪を使わん限り、私には戦う氣はない」

「ああ、もういいセイバー。とにかく僕は諦めてるよ……お前がそういう奴だつて。それにそのサーヴァント、つて何だか言いにくくな。お前何のサーヴァントだ？」

「貴方にそれを明かす必要がありますか？」

相変わらず他人を刺激する物言ひに、感じるところがあり、つい冷酷な声で返してしまつ。

「おいおい、そう殺氣立つなよ。セイバーは戦う氣がないつて言つてんだ。令呪を使ってまで無駄な戦いをするほど僕は馬鹿じゃない」

慎二は左手で髪を搔き上げるようにしながら尊大な口ぶりで話す。その動作一つ一つが癪に障るのは本能的な部分であり、どうしそうもない感情であつた。

「また始まりましたか。一体どこのからそんな自信が湧いてくるのでしょうか。

「なあ、そこで寝てる衛宮の奴、召喚したけどどうせ半人前のモグ

りだから倒れているとか、そんなどこじゃないのか？」

慎一のくせに、完璧ではないが意外と良い線を突いてくる。慎一のくせに。大事なことなので心の中で更にもう一度繰り返す
慎一のくせに。

「セイバーのマスター。仮に貴方の憶測が合っていたとしても、私には貴方に對し素直に応えるメリットがありません」

「あるぞ」

「何ですって？」

「最優のセイバーを引き当てたこの僕が、そこでくたばつてるへっぽこ衛宮と同盟を結んでやつてもいい。そう言つてゐんだ」

やけに得意げなニヤケた笑みに不快感を覚える。気持ち悪い。おそらく桜が召喚したセイバーを偽臣の書で従えて舞い上がっている道化ぶりが、慎一の存在そのものが生理的に受け付けない。

しかし、慎一の提案は私一人の感情論で簡単に跳ね付けられるものではない。

士郎はまだ目を覚まさない。

協力体制をとれるであろう凛やアーチャーともまだ会っていない。

前回の聖杯戦争を生き残ったセイバーの事情や現在の聖杯の状況もわからない。

慎一のサーヴァントとついと咲耶のサーヴァントでもあるところだ。

私はどうするべきですか

か。桜?

おまけ

「……でも、慎一よ。その話はライダーのマスターが田を覚まさねば無意味では？」

「多分、もうすぐ田が覚めるとほんのりですが」

「そうだな……ってセイバー……お前こいつがライダーって知つてたのかよ、言えよ……！」

「慎一、駆け付け一杯だ。これは格別に話こざ

「僕のサーヴァントのくせに無視すんなー！」

「ちなみに“ちーかま”、“そひみ”、“茎わかめ”も貰つておいた

た

「……もういい。この馬鹿が起きるまで今夜は飲んでやる。そこ

茎わかめ一緒にほり寄こせセイバー

「ほれ

「あつ血になこれ

「であるひつ?」

「もう一杯注いでくれライダー

「……何で私が慎二なんかに」

「な、なんだよ。これは元はと言えば僕の金で買ったんだぞ。ただ酒飲ませてんだ当然だろ?」

「うつ、慎一が正論を言つなんて。確かに立場を考えれば……いや、しかし、私のプライドが」

「ライダー、私にももう一献

「ええ、どうぞセイバー」

「何なんだよその露骨な差別は! 衛宮のくつぽこサーヴァントのくせにい……」

「何か言いましたか慎二?」

「そして、いつの間にか呼び捨て。さつさと起きる、何とかしろよ衛宮! お前正義の味方なんだろ! ? この性悪女をじつにかしてくれ!」

第4話 IJ-1は一献如何かな？（後書き）

あとがき

つてことで今回はまさかのワカメ回でした。色々サーヴァントを予想してくれている方も多いみたいでしたがいかがでしたでしょうか？　日本の英雄、しかも架空の存在ですが、原作でも出てきたし、小次郎セイバーでも誤差範囲内ですよ？

ワカメがセイバー（小次郎）に振り回されてZEROでいうウェイバーっぽいポジション。根は慎一のままでし、魔改造まではしませんが、ちょっと一味違つワカメです。どちらかというとホロウ準拠。

そして田覚めぬ士郎。空氣です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739z/>

王の酒と自転車2号

2011年12月25日18時59分発行